

保育計画成果報告書

法人名等	株式会社 フロンティアキッズ
施設名	みらい保育園
報告者（役職）	竹内 章敏（施設長）
住所・連絡先	埼玉県川口市西川口1-39-5
	☎ 048-240-0008
	E-mail mirai@f-kids.co.jp

○タイトル（保育計画）

楽しいことは学びの泉 ～言葉を越えた発達支援～

○主な助成備品

運動マット、平均台、跳び箱、飛び石、輪投げ、フラフープ、パカポコポコ、絵本

1. 保育計画策定の目的

当園の特殊事情としては入園児の7割以上が外国籍（中国、韓国、東南アジア諸国）でその大多数の子どもたちが日本語を理解できない（聞き取れない、話せない、書けない）という状況下で開園したということがあります。その為、「言葉の壁」が主な原因で保育者の子どもへの話しかけ・声かけが行き届かず、通常日本人のお子さまにおいて計画的に進められるような、月齢に即した保育活動や内容の幅広い展開が非常に困難であったという悩みを抱えておりました。

そこで、外国籍の子ども達でも積極的に興味を示す、1）体操、運動、スポーツ、ゲーム 2）絵本の読み聞かせなどの活動を中心として、保育所保育指針で求められている月齢に即した保育の実践・集団生活の教育・子どもたちの発達の支援を実現していきたいと強く思い、今回の保育計画の策定に至っております。

2. 具体的な実施内容

■探索運動、トンネルくぐり/0歳児クラス

※使用遊具：運動マット、トンネル



<ねらい>

ハイハイしたり、トンネルをくぐったり、マットの上でとんだり、寝転がったりと自分の力で体を動かす楽しさを味わう活動を展開する。柔らかくカラフルなマットで子ども達が思い思いに安心感と興味を与える。

<配慮>

心身の発達が未熟であることから、安全な環境で保育者が「こっちだよ!」「トンネルくぐれたね!」「上手だね!」などと適切に声かけを行うことで子ども達が自分の力で動くようとする気持ちを支援する。

■身体バランス感覚の向上・足腰の筋力の向上/3歳児クラス

※使用遊具：パカポコポコ、フラフープ



<ねらい>

体の各部位を自分の意志で自由に動かし、更にその動きを1つの目的を達成する為に統合していく意味ある動きへと向上する。集団で目的をもった運動や、楽しみながら参加できる活動の中で喜びや達成感を味わう。

<配慮>

外国籍の子どもたちは、身体は自由に動くが、保育士の言葉の指示の下に即座に行動を起こしたり止めたりすることが出来ないため、一定の決まった動きや流れを一通り見せてから活動に入る。体で覚えた一連の動きは言葉での認知を超えていることから、出来たこと、難しかったことを身体で学習し、同時に簡単な言葉で繰り返し伝えることで言語・認知の側面からも支援する。

■体幹と末端部位のコーディネーションの向上、動きの強弱の使い分け、足腰の筋力強化、絵本の読み聞かせ

※使用遊具：運動マット、跳び箱、絵本



<ねらい>

目的を持ち、結果への目標設定（イメージ）ができる。難しいことへチャレンジする意欲を持つ。楽しい雰囲気の中でお友達と協力して目的を達成する喜び、意欲、自信を持つ。小学校入学に向けての体力づくりを行う。静かに聞く態度を学び、物語やお話しの理解力や先を予想する力を身に付ける。

<配慮>

体力もついているので、個人差を考慮しつつ、活動の時間を長くしたり範囲を少しずつ広げたりして無理のない内容とする。達成への目的意識が強くなることから、がむしゃらに行動しようとする際は「ゆっくりと」「最初はx x、次にx xだよ」などと保育者からの声かけを工夫する。外国籍の子どもは日本語の発語が出来ないだけで、状況の認識は出来ているので、急がず、子ども達の集中力を見極めながら日本語の言葉を一つ一つ丁寧に読み聞かせる。

3. その成果と評価

これら運動を継続的に行ってきた結果、各クラスにおいて以下のような状況の変化と保育活動内容と質の向上が見られました。

<0 歳児>

自分の力で楽しみながら体を動かすことで、体幹・腰・両腕・両足の発達が促され、自分で歩行する意欲を見せる子が顕著に現れた。カラフルな絵本に興味を示し親しむことで、保育者の声かけを通して、1日数回の絵本の読み聞かせの時間には子ども達が自分の力で保育者の前に歩み寄って座り、絵と言葉に集中するなど、子ども達の1日の生活の流れにリズムが生まれた。

<1 歳児>

歩行の力が更に促され、走る・飛ぶ・蹴るなどの動作が多数の子どもに顕著に現れ始めた。絵本の読み聞かせを通して日本語に親しむことで、発語が促され、外国籍の乳児においても日本語の発語（せんせい、ごはん、おむつ、トイレ、だめ、いいよ、etc.）が母国語より顕著に見受けられた。

<2 歳児>

運動においてはバランス感覚のトレーニング（飛び石遊具の活用）などを通して、脚・腰・体幹の発達が促されたことで階段（園庭滑り台遊具）を上る・下りるの動作を自分の力で意欲的に行えるようになった。絵本（乗り物、食べ物、動物、自然現象）の読み聞かせを通じて目にとまった人物・物・情景について日本語で積極的に考えたことを自発的に話したり、クラスの他の子ども達との間では言葉（2語文、3語文）を使って自分の思いを伝えたり、注意し合ったりする姿が多く見られるようになった。

<3 歳児>

身体の各部位の動きを意味ある動きへと統合して行う運動（ケンパー、前転・後転、パカポコポコ、フラフープ、etc.）を重ねたことで、全身のコーディネーション能力が向上し、歩行においても足がもつれる等で自ら誤って転倒するなどの事故が減った。又、簡単な日本語を動きと連動させて行ったことで、日本語の発語が見られなかった外国籍の子ども達が意欲的に日本語の単語（1語文）や文章（2語文・3語文）を日常的に発語するまでに成長し、外国籍の保護者もその発達のスピードには驚かれていた。

<4 歳児>

クラス内で平均台を使用したバランス感覚の育成やチームに分かれての競技（サッカーゴール使用）を通して、保育活動に集中力をもって参加する姿が顕著に見られるようになった。集団で活動に参加する習慣がついたことで、今までの自分勝手な振る舞いが多かったクラス環境も改善し、集団としてまとまりのある環境へと変化した。それに伴って子ども達の間には日本語を使って思いを伝えるということも習慣づけられてきた。

<5 歳児>

運動マットを使用した前転・後転、跳び箱、平均台、フラフープなどはこれまで1度も経験したことがない子どもが多く、最初は消極的であった子ども達も、回数を重ねるごとに意欲的に参加するようになった。昨今、社会構造の変化やライフスタイルの変化などによる未就学児・就学児の運動不足の問題があるが、活発な動きが求められる月齢におい

て、天候に関わらず毎日のように全身を使った運動を行えたことで情緒的・精神的にも充実した生活を送ることができた。又、遊具を使用する時は保育者の言葉がけを通じて目標を持ち、それに向けて努力することや、1人では難しい時には皆で協力し合って達成する姿が見られるようになった。

絵本の読み聞かせを通じて、子ども達が自分たちのお気に入りの絵本を知ることができ、自分で声に出して読んだり、お友だちに読み聞かせてあげたりすることで日本語の語彙が飛躍的に増え、又同時にひらがなやカタカナを学ぶ機会を設けたことで自分の名前、色の名前などを書けるようになり、日本語に対する子ども達の興味・関心が見受けられた。

4. 今後の課題と展望

室内で運動遊具を活用できるようになり、子ども達の運動量、保育活動中の集中力が増したが、出来る子と出来ない子の差が出てきたことで、保育者の子どもの発達に応じたバランスの取れた支援がより一層求められる状況になっている。集団生活を大切にしつつ、一人ひとりの「出来る」、「出来ない」の思いに呼応し、子ども達が勇気を持てるような支援を考えていく必要がある。

又、幼児においては依然として、日本語を意欲的に使ってお話できない子どもが多く、その大多数は家庭での保護者による言葉の環境によるところが大きいと思われる。外国籍の保護者とはより一層の信頼関係構築に努力し、子どもが日本という国・社会・学校・風土において日本語で考え、日本語で学ぶことの大切さを伝えていきたいと思う。

開園から2年が経過するところではあるが、外国籍の子どもたちが日常の保育活動において、保育者の日本語をよく理解し、月齢に応じて自ら上手に使える日はまだ少し先にあるように思われる。しかし、地域や日本国内において、今後も外国籍の人数が増加の一途を辿るであろうことを予測すると、私たちは、将来、日本に生活の根を下ろすことになるかもしれない外国籍の子ども達に、日本で生きる為の礼儀作法や道徳を伝えていくという重大な任務を預かっていることを教育者として自覚せずにはいられない。

以上